

住民ボランティアによる地域音楽祭の創造

生涯教育計画コース 新 藤 浩 伸

Community Music Festival Supported by Volunteers in Japan

Hironobu SHINDO

In Japan, volunteers now support increasing number of music festival. This paper will call them "community music festival". The aim is to clarify the meaning of a participation of volunteers and their learning, showing a practice of Kiso Music Festival.

First, some main discussions are shown which are related to community music festival. Since 1970s, cultural activities based on community have been practiced. These are studied in the field of community education. In addition, since 1990s, a perspective of economics and management has been introduced in art activities.

Secondly, after introducing the history and classification of music festival, the participation of volunteers and its meanings are shown. As one characteristic practice, Kiso Music festival is reported. The festival is supported by Cooperation of administration of social education and volunteers.

目 次

- 1 課題、対象と方法
- 2 地域音楽祭への視角
 - A 地域文化
 - B 文化政策・文化行政、まちづくり、アーツ・マネジメント
 - C 集団・協同
- 3 音楽祭の現状
 - A 歴史
 - B 分類
 - C ボランティアの参加と意義
- 4 住民ボランティアによる地域音楽祭の創造—木曽音楽祭
 - A 概要
 - B 特色・基本理念
 - C 企画内容
 - D 運営組織
 - E ボランティアの学び
- 5 音楽祭の担い手にとっての芸術の学び

本論ではなかでも音楽祭に注目する。音楽祭の開催にあたり、地域文化の創造は主要目的のひとつといつよい。本論では、そうした音楽祭を「地域音楽祭」と呼び、地域文化の創造の問題をボランティア参加という形態に注目して考察を行う。なかでも、特徴的な実践を行っている長野県木曽福島町の木曽音楽祭を検討する。

日本の音楽祭についての研究には、音楽祭関係者の会議資料、音楽雑誌での特集記事のほか、網羅的に調査したいいくつかの報告書などがある。しかし、関わる者にとって音楽祭がいかなる意味を持つのか、という視点からの論考は多くない。ボランティアの問題は、社会教育・生涯学習の領域でも研究が進められており¹⁾、こうした視点からの考察を深めることは重要である。また、1970年代以降盛んに論じられた地域文化論ほかいくつかの理論的検討を踏まえ、音楽祭に関わった人々が得ている学びの現代的な特徴と意義を考察する。こうしたアプローチは、戦後日本の文化活動の歴史を理論的に把握していく一つの契機となりうるだろう。

2 地域音楽祭への視角

A 地域文化

1970年代以降、「地域文化」の概念は急速に注目され

文化祭、芸術祭、映画祭、音楽祭など、芸術文化の名を冠した祝祭は大小さまざま、数多く行われている。

た。草野滋之²⁾によれば、1970年代は、「日本の高度経済成長が、2度のオイルショックにより停滞し、『経済の時代』から『文化の時代』への展開が模索されていく、戦後日本社会の大きな曲がり角」であった。とくに、①地域文化運動：地域の子どもの文化創造と普及をめざす運動、②文化政策・文化行政：文化庁発足以後の文化政策・行政の政策、③学習文化活動：自己自身や家族・地域固有の歴史を見つめ、掘り起こしを進めていく学習文化活動、などを特徴としているが、この草野の整理は、当時の状況を端的に捉えている。このうち、①の地域文化運動であるおやこ劇場、地域文庫、児童図書館づくりなどは、深井耀子によれば「60年代後半にはじまる教育・福祉・環境問題等に取り組んできた住民運動の一環であり、それを背景とした社会教育を国民の学習権として自覚的にとらえる運動³⁾」であった。こうした大きな地域文化運動との関連でとらえていくことは、地域芸術祭を歴史的に位置づけていくために必要である。

B 文化政策・文化行政、まちづくり、アーツ・マネジメント

先の整理の②にあたる「文化政策・文化行政」は、1980年代以降特に呼ばれるようになった。高度経済成長によって国民の生活がある程度安定してきた1960年代後半から70年代を経て、1980年代から1990年代初頭にかけて、「市町村自治体行政の活発化、文化産業の展開、地域文化を活かしたまちづくり運動など、…様々な領域で『文化』が脚光を浴びるようになった⁴⁾」のである。さらに関連する概念として、「まちづくり」という概念は、昭和50年前後から盛んに論じられるようになった⁵⁾。社会教育・生涯学習の文脈からも、数多く論じられている。

また、近年、特に1990年代以降、芸術文化に関しては「アーツ・マネジメント」等の名で呼ばれる経営学的視点からの考察があり、この視点から音楽祭の検討もされている⁶⁾。こうした概念の導入の背景について河島伸子は、①公的文化支援の拡大、②企業メセナ発達、③全国地方自治体の文化施設建設、④特定非営利活動促進法制定、と述べる⁷⁾。芸術文化を施設や法制、経営等の視点から考察することは、文化芸術振興基本法が制定(2001年)された近年、さらに重要になっている。

C 集団・協同

前述の地域や経営の視点とは異なり、人的交流に注目しながら地域文化創造の創造過程を論じたものとし

て、佐藤一子の「文化協同」をめぐる一連の論考がある⁸⁾。佐藤は飯田人形劇カーニバルを取り上げ、劇人、行政、市民の三者が協同で人形劇カーニバルという地域文化を創造していく過程を詳細に分析している。また、北田耕也は一連の著作で、芸術文化活動の意義を一貫して説き⁹⁾、畠潤は、ロハ台の実践をみることで、1950年代の共同学習の過程分析からその意義を論じている¹⁰⁾。これらは地域の学習活動や芸術文化活動の創造過程に注目するものである。本論ではそうした視点を援用しながら、地域音楽祭に込められた協同での学びの意義について論ずることとする。なお、佐藤の近年の論考によれば「共同」とは、「一緒に力を合わせる」「目的や価値を共有する」包括的な共生・協力関係、「協同」とは、「意味の重複はあるが、『事業や活動に共にとりくむ』『協同事業体』」などと意味づけられ¹¹⁾、本論もそれに従うものとする。

このように、地域音楽祭は様々な視点から語られる。芸術や文化に関する言説が高まりをみせている近年は、議論が錯綜している状態ともいえ、個々の概念整理も課題であるが、大まかに時間軸でみると、①参加者にとっての教育・学習、②地域文化振興、③地域経済活動の三つの視点から論じられてきたといってよい。①の視点は、社会教育活動としての側面に注目したもので教育学的視点が強く、歴史も古い。②の視点は、1970年代以降の行政・政策的アプローチであり、そのありかたの再考も含めて論じられてきた。さらに近年、経済学・経営学の視点が導入され、あらたに③地域経済活動としてとらえる流れがある、と整理できよう。

こうした流れの中で、教育行政と文化行政の切り離しという行政的潮流とも関係して、地域における教育運動、文化運動としての①の視点、すなわち参加者にとっての学習の内実やその意義などは、近年等閑視されつつあるのではないだろうか¹²⁾。筆者は、類似の課題意識にたって、地域音楽祭への参加による学びについて考察する。

3 音楽祭の現状

A 歴史

戦後日本において芸術文化を冠した祭典は、芸術祭(当時の文部省社会教育局芸術課により創設)や国民文化祭(文化庁により昭和61年創設)をはじめ、自治体や市民が主催する文化祭なども含めれば非常に多い。それらの検討は別稿にゆずり、ここでは音楽祭に絞って

その歴史を概観する

「音楽祭」という語は、music festival(英), Musik Fest(独)であり、ラテン語のfestumに由来し、これは「めったにないご馳走」を意味した。すなわち、非日常的で、集団的で、豊かで、陽気なときを意味するといえる¹³⁾。高崎保男によれば、近代においてこのfestivalという言葉を初めて意識的に用いたのはリヒャルト・ワーグナーである¹⁴⁾。彼がその後半生において委嘱や依頼なしに制作した作品は、従来のオペラ劇場が日常的なレパートリーのひとつとして上演するには、質・量ともに桁外れのものであった。そしてバイエルン国王ルードヴィヒ2世の庇護のもと、田舎町バイロイトに祝祭劇場を建設し、自作『ニーベルングの指輪』(1876年初演)『パルジファル』(1882年初演)の上演をそこでのみ行った。このバイロイト音楽祭(Richard Wagner Festspiele Bayreuth)が、世界中の数ある音楽祭の中で最も古い。また、ザルツブルグ音楽祭(1887年～)創始者の一人フーゴー・ホフマンスターの音楽祭設立宣言によれば、Festspiel(フェスティバル)とは、Fest(祭祀)とSpiel(遊戯)の合一に他ならず、日常の生活から断絶し、美しい土地で身体と心を自由な遊びの世界に解き放ちながら、音楽と芸術に帰依する事を通じて、新たな人間精神の創造を実現しよう、という理想から出発していた。

このようなワーグナーないしホフマンスターの理念をもとに、第二次大戦前後に、フィレンツェ五月祭、エクサン＝プロヴァンス音楽祭、エディンバラ音楽祭などが生まれた。大戦後、ヨーロッパのフェスティバルは急増し、その総数は大小合わせて100を越す。交通・通信の発達による国際交流の活発化、一般市民の生活状態の変化、レジャーへの欲求の増大などがその背景にある。

高崎は、地域に注目して音楽祭の性格を2つに大別している¹⁵⁾。ひとつは、風光明媚な観光地、もしくは普段めぼしい音楽活動を持っていない辺鄙な場所やリゾート地で、最も良い季節(夏もしくは春)を選び、特別な催しを行うもの(バイロイト音楽祭、エクサン・プロヴァンス音楽祭、ペーザロ・ロッシーニ・オペラ・フェスティバルなど)。もうひとつは、普段から活発で豊富な音楽活動をもっている大都会で、年に一度、日頃の音楽家達の音楽生活の総決算として行う、音楽の見本市的性格のフェスティバル(ミュンヘン・オペラ・フェスティバル、ウィーン芸術週間、ベルリン音楽祭、チューリヒ・オペラ・フェスティバルなど)である。ヨーロッパだけでなく、アメリカでも数多く行

われている。

一方、日本で「音楽祭」あるいは「フェスティバル」の名前が付けられた音楽行事は、1958年に始まる大阪国際フェスティバルが最初である¹⁶⁾。朝日新聞文化財団と大阪国際フェスティバル協会、朝日新聞社による開催、2003年で44回を数える。毎年世界各国より数々の一流のオーケストラや演奏家たちを紹介している。

現在の日本における音楽祭の中で、現在その活動を継続し、知名度の高いものは、1980年代に開始されたものが多い。例えば霧島国際音楽祭、草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティバル(1980年)、つくば国際音楽祭(1985年)、北九州国際音楽祭(1988年)などがそうである。ここで、これらいわば「老舗」の音楽祭が、その名称に「国際」という言葉を入れていることに注目すべきである、と久保田慶一は指摘する¹⁷⁾。すなわち、これら音楽祭は「国際」と称して、海外の有名な音楽家や団体を招聘し、音楽祭のメインとしたのである。この背景には、当時のいわゆる「バブル経済」の只中にあつた日本の企業や自治体による、多額の資金援助がある。当時、各地域に大きなホールが建造されたことと並行し、各市町村では地名を冠した音楽祭・フェスティバルが多く誕生した。企業も「冠コンサート」と称して文化事業に精を出し、音楽祭に対しても積極的であった。各地方自治体も、村おこし・町おこしの起爆剤にすべく、誘致に熱心であった。

90年代になると、音楽祭・フェスティバルの名を冠したイベントが急増する。ここでの特徴は、大企業や専門家の主催・主導ではなく、地域住民が積極的に参加する音楽祭が増加したことにある。この背景として、バブル経済の終焉、「生涯学習」が叫ばれたことで、人々が地域の連帯を求め、自分の趣味や生きがいを追及し始めたこと、さらにバブル期に各市町村に大きなホールが次々と建造され、地域住民がその利用のために音楽祭を立ち上げた、と久保田は分析する¹⁸⁾。

また、音楽界が直面する課題も多く指摘されている。特に日本の場合は、いわゆる「バブル経済」の崩壊によるところが大きい。不況を受け、自治体・企業とともに助成や補助の削減が行われたため、各地の音楽祭は経営や運営に行き詰まり、やむなく延期や中止に追い込まれた事例もある。これらの課題は、文化行政、地域おこし、企業メセナ、市民音楽団体、公共ホールの事業運営、教育的側面など、様々な観点から考察する必要があるが、久保田慶一と木下大輔の論を踏まえると、一般的に以下の点に整理できる¹⁹⁾。①資金面の問題、②地域住民・聴衆と地域・主催者・音楽家の関係、③

ヨーロッパ音楽中心の音楽祭にあって、伝統文化をどう活かし、一般の人々に参加を呼びかけていくか、④グローバル化した世界にあって、どのようにしたら世界に向けて情報発信できる音楽祭となるか、この四点である。これをふまえ、本論では②に焦点をあて、音楽祭への参加が地域住民にとっていかなる意義をもたらすかについて、ボランティア参加に注目する²⁰⁾。

B 分類

音楽祭というひとつの地域イベントに対して、どのような視点での分類が可能であろうか。音楽祭について多くの論を発表している山本美紀は、武生音楽祭の事例から、その歴史や開始当時の経済状況、政権、人的交流、風土・人間性、芸術監督の存在など、様々な観点から論じている²¹⁾。

また、現在わが国に140存在する²²⁾音楽祭は、久保田²³⁾によると、以下の四つの観点から分類できる。すなわち、①演奏者：「プロ型」(国内外の著名な音楽家を招待。海外の方法に倣うことが多い)、「アマチュア型」(学校などを中心とした地域行事という性格)、「折衷型」(日本の音楽祭に多い。プロとアマチュアの共演や鑑賞・教育活動などに力を入れる)、②内容：「テーマ型」、「オムニバス型」等、③参加形態：「コンクール型」(プロの音楽家に審査員になってもらうものなど)、「セミナー・レッスン型」(住民が音楽家からレッスンを受ける形のもの)、「交流型」(音楽家と聴衆とのコミュニケーションの場をつくるもの)等、④運営形態(後述)、である。

こうした分類のうち運営形態に注目すると、久保田によれば、まず、音楽監督がいるかどうかで「音楽監督型」と「委員会型」に分類できるが、さらに運営主体に注目することで、以下の四つに分類できる。①行政型：地方自治体の担当部署に委員会がおかれ、そこから委員が委嘱されて、委員会が構成される。②ホール型：公共ホールに委員会が設置される。③ボランティア型：ボランティアが実行委員会を組織し、行政やホール側がサポートする。④メセナ型：文化財団や企業がサポートする²⁴⁾。

C ボランティアの参加と意義

音楽祭をボランティアで支えるという構造は、アメリカによくみられるものである。芸術家会議の報告²⁵⁾によれば、米国はもともとフィランソロピーに基づいたボランティア活動が極めて活発な国であり、芸術フェスティバルの運営においても、ボランティア組織はヨー

ロッパより充実した制度が見られるという。タンブルウッド音楽祭はその大規模かつ代表的なものである。

日本の場合、芸術的なイベントとして、あるいは文化行政の一施策とされがちな側面もある²⁶⁾が、音楽祭におけるボランティアは、そうした問題とも関係する。UFJ総合研究所作成資料²⁶⁾によれば、以下のような活動に分類できる。①事務局(総務、企画、出演交渉、資金調達・管理、送迎、交流、ニュースレター等の発行等)、②広報・宣伝(ポスター、マップ、プログラム、アンケート等の作成、チケットセールス等)、③会場関係(設営、音響、司会、場内アナウンス、もぎり、受付、案内、物品販売、交通整理、整備、清掃、記録、医療救護等)、④出演関係(舞台美術製作、エキストラ出演等)、⑤通訳・翻訳。ボランティア活動の代表的なものとして、福井県・武生音楽祭では、広報・宣伝の一環として、イラスト入りの武生市内マップ(日本語版、英語版)を自主的に製作・配布している。また、北海道・パシフィックミュージックフェスティバルでは、海外から参加した学生に対して、野店、着付け、華道、日本料理等を紹介する「文化交流プログラム」を企画・実施している。長野県のサイトウ・キネン・フェスティバル松本では、マニュアルを作成してボランティア自身の教育を実施、「SKFボランティア憲章」としてボランティアとしての心構えや基本的マナーを掲載、その他英語及びドイツ語による挨拶や案内の例文を掲載している²⁷⁾。このように、民間・ボランティアの力で音楽祭が起こされるケースは多く、先述したアメリカ的な非営利組織が、近年日本においても発達していることが要因として挙げられよう。

音楽祭の開催におけるこうしたボランティア活動の意義・必要性として、太下義之は、①行政や運営する側の眼の届かないところを独自のネットワークで網羅し、柔軟性を持って活動を展開できること、②ボランティア活動が個人の新しい自己実現の場として期待されており、ボランティアを中心に交流が活発化し、結果として各地域における既存の諸活動に大きな刺激を与えることが期待される、という二点を指摘し、音楽祭開催を通じてよりよい地域社会の創造をめざすものだとしている²⁸⁾。また、芸術家会議は、ボランティア参加が、「自分たちがフェスティバルを支えているという誇りに結びつき、観客として参加する以上の喜びと体験が得られるもの」とし、「たんに不足する運営スタッフを拡充するというだけではなく、フェスティバルを地域社会に根付かせ、新しい観客層を開拓し、そして市民と芸術との新しい関係を構築していく」視点

が望まれているとしている²⁹⁾。

さらに、活動における課題として、太下は、マネジメント的発想、ボランティアの社会的評価の仕組みの導入を挙げ、それによるボランティア組織の活性化や、社会に開かれたボランティアのイメージ確立などを目指すことを提唱する³⁰⁾。

以上に述べたボランティアが活躍する音楽祭の中でも、前節で分類された①と③の折衷ともいえる、行政とボランティアとの協同作業によってつくりあげていく例は、地域全体を巻き込んでいく力を持つ。次章では、その一例を紹介する。

4 住民ボランティアによる地域音楽祭の創造—木曽音楽祭

A 概要

ここまで、音楽祭におけるボランティア参加の現状とその一般的な意義・課題をみてきたが、個別事例として、長野県木曽福島町で行われている木曽音楽祭を検討する。運営の主要メンバーである越孝弘・木曽福島町教育委員会社会教育係長へのヒアリング(2003年9月25日)に多くを負った。

長野県木曽郡木曽福島町は人口7870人(2003年9月1日現在)、長野県西南部にあり、木曽御嶽山・木曽駒ヶ岳山麓の谷間に位置する。木曽川、JR中央西線、国道19号線が中央を南北に貫く。古くは中山道の福島宿として栄え、現在では木曽郡の郡都として官公庁関係機関が集中し、第三次産業への従事者が多い。また、史跡だけでなく、高冷地の気候風土を活かして、スキー場やゴルフ場、別荘地などがあり、観光地として一年を楽しめるような環境整備もなされている。夏場は観光客や登山客で賑わう。

一年を通して行われる様々なイベントの中でも、八月下旬、四日間にわたり行われる木曽音楽祭は、特有の賑わいを見せる。プロフェッショナルの演奏家を招き数日間にわたりコンサートを開く室内楽の音楽祭である。2003年で29回を数え、集客もよい。運営形態は教育委員会主導だが、地域住民を巻き込み、公民館や地域各所で演奏家や演奏会を支える基盤ができている。また、実行委員会の対応の丁寧さや地域住民の密接なかかわりが、受付応対、地域ボランティアの参加(宿泊所・演奏家の家族の遊び場等の提供、演奏家への手作りの食事提供)、準備から片付けまでの演奏会のサポートなど随所にみられ、来訪者・演奏家に心地よさを与えていている。

B 特色・基本理念

「小さな町の素敵なお祭り」と名づけられた木曽音楽祭のプログラム(表2)は、木曽福島中学校体育館で行われる「前夜祭コンサート」、木曽文化公園文化ホールで行われる「フェスティヴァルコンサートⅠ～Ⅲ」で構成される。出演者は24人と音楽祭の中でも少人数で、プロフェッショナルの演奏家がクラシックの室内楽曲を披露する四日間である。

この音楽祭の特色として、①小規模、②観光が主目的、③行政主導だが地域との連携が進められている、という三点が挙げられる。第一に、その規模の小ささは特筆すべきものがある。表1にみると財政規模は大きくななく、演奏家も破格の安さで来訪する。

第二に、地元以外からの来訪者が非常に多く、近隣町村への経済効果も含め、外に向かって観光イベント的な要素が大きい。このため、音楽祭の開催により町の文化的基盤を強くし、地域文化が醸成されていく、と必ずしも一口に言うことはできない。「全国からクラシックファンを呼んでくる³¹⁾」ことが趣旨であるために、プログラム・演奏家人選は、専門家(企画制作を担当する東京アーティスツ)に任せている。木曽に行かないで聴けない曲を選ぶため、知名度の低い曲が多く、誰しもが容易に参加できるものとはなっていない。

第三に、後述するが、地域に根ざすために地域住民を巻き込む工夫がなされている点である。最も大きいのは、ボランティアによる演奏家への食事や住居の提供である。演奏家が滞在する一週間、朝晩二回の食事がすべてボランティアの手により作られる。住居は、多くは住民から貸し別荘等を提供され、演奏家は合宿のような一週間を過ごす。越氏は「お金をかけて手間を省いてしまうと、音楽祭に関わる人たちが興味がなくなってしまう。手間ひまをかけることで、『大変な一週間だけれど音楽祭のために集おう』と楽しむ体制が職員やボランティアのなかでできている。」と述べる。行政職員も、普段の職務とは違い、祭りを楽しむ一週間だという。このように、行政主導で行われるイベントながら、地域のボランティアの自主性を活かすというバランスを取っている点が特徴的である。

課題として、音楽祭を地元に意識を向けさせる問題が大きい。先述したように、観光を主目的とするため、地元の参加は少ない。以前は、音楽祭は事業の一つとして、行政内でも町内でも知名度が高くなかった。隣の日義村に文化公園が建設され会場が離れてからは、さらにそういう雰囲気が強くなった。そのため、過去に行っていた中学校の吹奏楽部への指導を2002年に

<収入の部>

科目	14年度決算額	13年度決算額	説明
助成金	1,700,000	3,100,000	芸術文化振興基金助成金
町補助金	4,000,000	2,837,148	木曽福島町補助金
補助金	0	100,000	木曽文化公園自主企画事業出前講座補助金
入場券売上金	6,789,620	6,895,395	入場券売上金
協賛金	2,679,505	3,495,000	信毎文化事業財団・日本製紙株式会社ほか
雑収入	91,237	94,459	預金利息等
歓迎セレモニー入場券	16,000	95,000	
ふれあいパーティチケット	177,000	206,000	
ポロシャツ売上金	0	262,500	
合計	15,453,362	17,085,502	

<支出の部>

科目	14年度決算額	13年度決算額	説明
出演料	6,300,000	6,500,000	演奏家出演料(出演料・源泉徴収)
旅費	843,681	881,760	演奏家旅費・会員等出張旅費・車借上げ料
宿泊料	426,300	260,400	ホテル等宿泊費
宿舎借上げ料	322,500	341,176	宿舎提供者謝礼
入浴料	35,100	59,500	音楽家・スタッフ入浴料
宿舎備品費	175,705	212,175	布団・掃除用具・生活用具等
会場費	1,283,965	1,906,300	ピアノ調律代・会場使用料・備品使用料
食糧費	785,545	787,080	演奏家食事代・パーティ費用
マネージメント料	1,260,000	0	マネージメント委託料
印刷費	1,564,681	1,748,920	チケット・チラシ・ポスター・プログラム印刷代
宣伝費	762,377	1,460,525	新聞・雑誌広告掲載料
事務費	29,176	193,469	事務用品
通信費	877,199	781,655	切手代等
譜面代	54,557	40,206	購入・貸し譜
賃金	0	0	宿舎清掃員賃金
著作物使用料	45,675	54,337	日本音楽著作権協会
雑費	194,439	249,827	布団借上げ料等
負担金	0	30,000	全国音楽祭団体連絡協議会負担金
歓迎セレモニー	90,462	349,972	入場料商工会支払分・助成金
ふれあいパーティ	402,000	418,700	
ポロシャツ作成代金	0	809,500	
合計	15,453,362	17,085,502	

表1 平成14年度の收支(第29回木曽音楽祭総会資料をもとに作成)

再開、前夜祭のリハーサルを地元小学生に公開、授業として昼間に見てもらうなど、地域、特に子どもへの配慮が多い。そうしたことがきっかけになって、フェスティヴァルコンサートを聴きに来る中高生もいるという。こうして未来の聴衆やボランティアを育てているのである。そのほか、施設の慰問コンサートや、アルプホルンのキャラバン隊が昼間町中を回るなど、プログラム以外の部分で、地元に接点を見出し、アピールしていく試みが地道に続けられている。

また、財政的にも助成金に頼る状態が続き、財政面や事業評価の視点からみれば、厳しい状態にある。こうしたイベントの開催・継続は、音楽祭を開催する人々の熱意や、根強い努力によって支えられているといつてよいだろう。

現在の運営形態に至るまでには、多くの試行錯誤があった³²⁾。音楽再運営の母体となった、1973年に設立された「木曽フィルハーモニック協会」は、当初完全な民間団体だった。地元のクラシック音楽愛好家達が、音楽の実演を聴く機会に恵まれない木曽に「自分たちで、演奏家をよんで、演奏してもらおう」と呼びかけ発足したもので、毎月のように著名な演奏家を招いて演奏会を開いていた。当時長野県内でも珍しかったこうした定期的な演奏会が開催できたのは、楽器製作者、飯田裕(当時24歳)の存在が大きい。71年、木曽福島に移り住んだ飯田は、楽器作りのかたわら「絵・音楽・文化は何でも東京でなければダメだという雰囲気がいやなんです、良い文化に接する機会があれば、地方にだって、それなりの文化が育っていいはずだ」との思いから、楽器づくりで知りあった演奏家を木曽に呼んだ。また演奏家も、「貴重な触れ合いが忘れられない、上野の文化会館にはない手ごたえがある」と交通費程度の出演料で、ホールもコンサートピアノもない木曽に訪れ演奏会を開いていた。1975年8月には、ビオラ奏者ウイリアム・プリムローズが、木曽福島に三週間滞在して公開レッスンと演奏会を開催し、音楽祭はスタートした。

翌年、さらにこの音楽祭を飛躍させようと、町長(当時)唐沢久雄・美貴夫妻は、人口600人の片田舎を音楽祭によって甦らせた町、アメリカ・バーモント州にあるマールボロに行き、音楽祭の運営を学んだ。著名な外国人演奏家を数々招き、当時国内でも例のなかった公開レッスンと演奏会を行う音楽祭を木曽の地に根付かせた。受講者も年々増え続け、遠く海外からの受講者もあらわれ、国際という名に恥じない音楽祭へと成長していった。組織もこうした音楽祭の成長に対応

する為に協会を社団法人化し、新たに組織した木曽福島国際音楽祭組織委員会は、各界の著名人を役員に迎え全国的な組織での開催となる。

しかし、年々華やかになっていく音楽祭は、出演料・渡航費等の経費は入場券の売上げでまかなえるものでは到底なく、厳しい財政状態であった。こうした状況を改善すべく、「木曽の粧味噌」販売による資金集めなども試みられたものの、大規模化した音楽祭は、音楽愛好家で作ったボランティア組織では支え切れなくなってしまった。演奏家の好意で破格の安さの出演料、宿舎もホテル等ではなく、理解ある住民が提供する山荘や、ボランティアの家へのホームステイでまかない、食事もボランティアで主婦らが世話をなど、できる限り節約しての開催であったが、毎回赤字は出、「音楽祭の質だけは落したくない」との熱意も限界に達した。そのため、木曽福島町に全面的な協力を要請し、町がそれ以後、地域文化の向上や過疎対策の一環として、事業計画・運営に本格的にかかわることとなる。名称も、「木曽福島国際音楽祭」から、「木曽音楽祭」に変更し規模こそ縮小したが、音楽祭は継続された。

こうして1986年、「木曽音楽祭実行委員会」が発足、事務局を木曽福島町教育委員会に置き、現在の体制を確立した。年々着実に入場者数も増え、財政的にも適正化が計られた。施設は当初町の体育館を利用していただけ、第16回からは、714人収容できるホール(木曽文化公園文化ホール)が隣の日義村に整備され、現在はそこで開催している。また、1982年から、企画構成に演奏家が参画し、今まで続けられている。このような経過を経て、2003年までに29回の音楽祭が開催され、住民・行政・演奏家の協力体制という独特の形態がつくられたのである。

C 企画内容

◆プログラム

- ・前夜祭コンサート 8月21日(木) 7時 福島中学校体育館
オープニング～福島中学校3年生による「木曽節」「木曽踊り」
日本民謡／寺島陸也編「木曽節」(木管八重奏曲版)
ニーノ・ロータ／加藤昌則編「ロミオとジュリエット」
アラン・リドー「フェルディナンド」
ストラヴィン斯基「なまえのない歌」
ショパン「バラード 第3番」

クライスラー「シンコペーション」「ロンドンデリーの歌」
ロジャース「サウンド・オブ・ミュージック」より
・フェスティヴァルコンサートⅠ 8月22日(金) 7時 木曽文化公園文化ホール
フンメル 七重奏曲ニ短調 op.74
スメタナ 弦楽四重奏曲第1番 ホ短調「わが生涯より」
ブリテン ファンタジー op.2
メンデルスゾーン ピアノ三重奏曲第1番 ニ短調 op.49
・フェスティヴァルコンサートⅡ 8月23日(土) 7時 木曽文化公園文化ホール
ミヨー 世界の創造
モーツアルト(ホプキンス編)木管五重奏「きらきら星による12の変奏曲」K.265
ハチャトゥリアン 三重奏曲 ト短調
シューベルト 八重奏曲 へ長調 op.166 D.803
・フェスティヴァルコンサートⅢ 8月24日(日) 3時 木曽文化公園文化ホール
モーツアルト 木管八重奏曲 変ロ長調 K.361
ヴィラ＝ロボス ブラジル風バッハ 第6番
シュポア 弦楽八重奏曲第1番 ニ短調 op.65
シューマン ピアノ四重奏曲 変ホ長調 op.47
◆出演者 25名
◆主催ほか
主催 木曽音楽祭実行委員会・木曽福島町・木曽文化公園
共催 信濃毎日新聞社・財団法人信毎文化事業団企画制作 東京アーティスツ

表2 第29回の概要

公演スケジュールは表2のとおりだが、この他にも前述のように老人施設、街中、駅前、中学校など、様々な場所で行われている。

宣伝・広告をみると、他の音楽祭に比べて、予算をほとんど使っていない。共催団体である信濃毎日新聞への広告と、ホームページによる広報が主体である。第25回から担当となった越氏が中心となり宣伝に力を入れ、集客は近年非常によい。ホールが満席に近い状

態が続いているため、現在は別の宣伝方法も模索中であるという。インターネットの利用やダイレクトメールの発送、関係各所へのチラシ配布など宣伝に力を入れたことと、町内への広報を充実させたこと、口コミなどが大きい。それまでは、実行委員に撒いて手売りでさばき、あふれることなど考えられなかったという。中京を中心に関東・関西方面からの聴衆が多く、二回以上来る「リピーター」が多い。

ここで、地域にむけた特徴的な企画のひとつである前夜祭コンサートについて、2002年第28回の前夜祭コンサートの模様を、筆者の記録をもとに述べる。前夜祭コンサートは圧倒的に地元からの聴衆が多い。通常のコンサートのみでは、ホールの遠さやプログラムから、「音楽祭が遠い」「選曲もなじみにくい」との声が上がった。これを受け、初日を前夜祭として、聞きやすい曲を地元の人々に、という趣旨で地元の中学校の体育館で行うことになったのである。入場料も安く設定され、入りやすい雰囲気が作られている。

2002年8月21日昼、演奏家は地元中学校の吹奏楽部の指導に行ったり、介護福祉施設にアンサンブルに出かけたりするなど、忙しく動いている一方で、会場設営が進められる。これらの動きを管理している実行委員は、青いポロシャツで汗をかきながらしきりに携帯電話で連絡を取り合い、また親しげに演奏家や地元の人達と足を止めて話す。

夜、舞台設営や飾りつけは、教育委員会の職員や町の音楽好きが総出で行う。椅子をならべ、ひな壇を並べる重労働は、夜遅くまで行われた。

22日朝、中学校から車で10分程の距離にあるホールで、演奏家たちはリハーサルを始める。彼らの子どもたちちは親しい地域の人に面倒を見てもらいながら、ラフティングやパン作りなどで楽しく過ごす。

昼になると演奏家たちが中学校にやってくる。前日の夜に設えた舞台でリハーサルを行う。演奏家の門下生や地元の子どもたちが見守る。控え室には、子どもたちが焼いたパンや、とれたてのトマトやキュウリが届けられる。

夕方、中学校の体育館には大人の列ができ始める。扉が開くと、受付の実行委員と親しげに世間話を交わす。体育館を大勢の聴衆が埋め、床に敷かれた緑のシートの上、パイプ椅子に座って開演を待つ。子どもたちは体育館のすみで遊びまわっている。

演奏に先立ち、木曽福島中の生徒による「木曽節」が披露される。聴衆をぐるりと取り囲み、歌と踊りをみせる。演奏は、これから三日間にわたり行われる室内

楽コンサートの曲目の一曲や、映画音楽などポピュラー曲などが次々と披露される。仮装をしての演奏には会場が沸き、ピアノのソロにざわついた会場が静まりかえる。司会者はじめ、楽しませよう、という演奏家の工夫が伝わってくる。

終演後には、聴衆も混じって会場の撤収作業を行う。演奏家たちは地元の酒屋でワインが振舞われ、夜を楽しむ。こうしたプロセスには、演奏家・聴衆(それまで準備に回っていた人達も聞き手になり、聞き手もまた準備にまわる)がともに支える喜びを得る仕組みがあるといえよう。

D 運営組織

現在音楽祭運営を支える「実行委員会」は、約60名からなる。この組織の特色として、社会教育行政・施設が重要な役割を果たしている。実行委員会は音楽祭前に三回、終了後に反省会として一回が行われる。準備は教育委員会のメンバーや、立ち上げ期から関わる、当時の苦労を知るボランティアが主体となって進められるが、メインスタッフは社会教育係の四名で、係長の越氏を中心に、ほぼすべての業務を彼らが行う。音楽祭に突入すると教育委員会全体がかかりきりになる。その他、ボランティアや教育委員会職員、OBも含めた歴代の職員も名を連ねる。一度関わった職員は、違う部局に移っても手伝いに来るという。また、昭和40年に建設された木曽福島会館の存在が非常に大きい。日常的に地域住民がサークル活動などで集う場となっており、音楽祭期間中も食事や打ち合わせなど、様々な用途で使われ、会館前では車の出入りが頻繁である。また、特に期間中、主要メンバーは毎晩反省会を行う。観客動員の増減についての議論や役割分担などの細かな打ち合わせを、酒を交えた打ち上げも兼ねて行い、次の日以降の士気を高める。

現在、公民館主催で始められ、公民館を拠点に活動している公民館学習サークルは22ある³³⁾。学習室は取り合いになるほどの盛況ぶりである。こうしたサークルが講座を終えた後も自主的に続けられるケースが多く、現在約30あるという。音楽祭の実行委員のメンバーにもサークル活動への参加者が非常に多い。芸術文化に限らない日常的な学習への参加や仲間作りの活動により意識が醸成され、普段から顔をあわせている関係が、ボランティアの基盤となっている。

町の社会教育計画をみても、音楽祭は町公民館研究集会、成人式、町民文化祭、敬老会とともに「社会教育関係行事」と並んで位置づいており、社会教育関係

事業の「主催事業」とされている³⁴⁾。地域社会教育と密接に結びついている音楽祭の姿をみてとれる。このイベントを社会教育事業とすることで、音楽祭を支えるボランティア組織との繋がりを強め、社会教育活動を活性化させていくというフィードバックも行われる。地域社会教育と密接な音楽祭・また実行委員会の姿がみられる。

多世代にわたる交流も、特徴的である。実行委員は若手職員が中心だが、OBも積極的に関与する。また、ボランティア内でも、若い世代へと活動を広めようとする試みがなされている。

E ボランティアの学び

ボランティアは、実行委員の中でも40人を占める大規模なものである。主婦がほとんどで、継続的に続けているメンバーが多い。現在の中心は60代～70代、音楽祭の立ち上げ期から変わらず続けており、実行委員会にも深く関わる。現在では、若い層を誘い、世代を広めていくことを目指している。主要な仕事は、演奏家に食事を作ることである。音楽祭が近くなると、中心メンバーが一週間の当番やメニューを自主的に決める。この食事ボランティアは開始期から続けられており、いかに郷土色を出した食事を提供するかに心を砕く。会期中は片付けまで含め毎夜12時近くにまでなり、決して容易なことではない。

このほかにも、前夜祭コンサートの会場設営などがある。「準備と片付けをみんなでやるのが公民館活動だ」とばかりに、コンサートの片付けもまた、聴衆も参加しての作業となる。約3000通のダイレクトメールの封入・送付作業にもボランティアは活躍する。その他、商店会へのポスター貼りの依頼、町内の別荘・企業の保養所へのチラシの配布といった地域との交流、宣伝の部分で、ボランティアと共同作業したい部分は大きい、と越氏は述べる。

ボランティアで関わることで、会期中のコンサートは無料で聴くことができる。参加の動機はクラシック音楽が好きということが大きいが、食事ボランティアにとっては、演奏家に「おいしかったよ」「ごちそうさま」と言ってもらうことが励みになっているという。演奏家も食事のおりに話を弾ませ、互いに交流しながら音楽祭の一週間を楽しんでいる。

5 音楽祭の担い手にとっての芸術の学び

木曽音楽祭は、地域住民をいかに巻き込んで行くか

という課題を抱えながらも、地域社会教育を基盤とするボランタリズムに支えられた地域芸術祭の創造を志向している。そこには、日常的な学習文化活動の環境醸成をめざす自治体社会教育行政の大きな影響力と、そこに集うボランティアスタッフとの強い結びつき・協同作業がある。ボランティアは、演奏家と地域を結びつける地点におり、裏方とはいって、演奏家と直接交流がある。これは数ある音楽祭の中でもかなり特徴的なものといえよう。

芸術の祭典は数多く行われているが、ともすればそれは、日常生活と関係のない、ときに高尚なものとして芸術を矮小化してしまうおそれもある。しかし、これまでみてきた木曽音楽祭のボランティア参加者には、自分たちが支えているという自負やよろこび³⁵⁾がある。ボランティア参加により、自分たちがフェスティバルを支えているという誇りに結びつき、観客として参加する以上の喜びと体験が得られる。さらに、しばしば地域イベントにみられるような不足する運営スタッフの拡充するという皮相的な意味には決してならず、フェスティバルを地域社会に根付かせ、新しい観客層を開拓し、そして市民と芸術の新しい関係が構築される可能性をもつ。こうした参加のプロセスから得られる喜びや学びが、その意義といえよう。住民ボランティアと行政が協同関係構築を目指しつづ進められている木曽音楽祭は、地域社会教育が大きな要因となって、ともすると生活と乖離しがちな芸術を身近に感じ、またみずからの資源、地域の資源として芸術文化を再認識する学びの契機となっている。

芸術と日常生活の関係をめぐる問題は、様々な場面で顕在化する。地域音楽祭のように両者をつなぐ場面に注目することは、成人にとっての芸術の学びを考察するうえで重要である。

(指導教官 佐藤一子教授)

註

- 1)日本社会教育学会編『ボランティア・ネットワーキング—生涯学習と市民社会—』東洋館出版社、1997
- 2)草野滋之「戦後社会教育運動史における『文化芸術活動』の位置づけに関する考察—1970年代の社会教育推進全国協議会の活動を中心に—」千葉工業大学研究報告人文編第40号、2003
- 3)深井耀子・片岡陽子「地域における児童文化の創造—西日本の家庭文庫・地域文庫・親子劇場—」『月刊社会教育』1977年11月増刊号
- 4)草野、前掲論文
- 5)阿蘇裕矢「まちづくりと地域振興」上野征洋編『文化政策を学ぶ人
- のために』世界思想社、2002、p.155
- 6)小林進『コミュニティ・アートマネジメント いかに地域文化を創造するか』中央法規、1998
- 7)河島伸子「日本におけるアーツ・マネジメントの始まり」川崎賢一・佐々木雅幸・河島伸子『アーツ・マネジメント』放送大学出版、2002、p.37
- 8)佐藤一子『文化協同の時代』青木書店、1989、佐藤一子編『文化協同のネットワーク』青木書店、1992 など。
- 9)北田耕也『現代文化と社会教育』青木教育叢書、1980、『大衆文化を超えて』国土社、1986、『自己という課題』学文社、1998 など。
- 10)畠潤「『ロハ台』の会話から学ぶ—1950年代の共同学習・生活記録運動を見つめ直す視点」北田耕也・草野滋之・畠潤・山崎功編『地域と社会教育—伝統と創造』学文社、1998
- 11)佐藤一子『子どもが育つ地域社会 学校五日制と大人・子どもの共同』東京大学出版会、p.11
- 12)そうした中で、文化政策に関する研究を数多く行っている小林真理の以下の編著のアプローチは、ホールを拠点にした地域文化創造を追ったもので、注目される。小林真理・小出郷の記録編集委員会編『小出郷文化会館物語—地方だからこそ文化のまちづくり—』水曜社、2002。
- 13)久保田慶一「音楽祭とは」平成12年度調査委員会報告書『日本の音楽祭・フェスティバル』財団法人音楽文化創造、2001、p.5
- 14)高崎保男「前向上」高崎保男・黒田恭一編『ヨーロッパの音楽祭』朝日新聞社、1994、p.1
- 15)高崎、前掲書、p.3
- 16)以下の論文に経過が詳しい。山本美紀「戦後の日本における国際音楽祭の受容に関する一考察」「文化経済学」第3巻第3号、2003
- 17)久保田慶一「わが国の音楽祭の現状と『音楽祭サミット』」平成12年度調査委員会報告書『日本の音楽祭・フェスティバル』財団法人音楽文化創造、2001、p.1
- 18)久保田、前掲書、p.1
- 19)1990年に設立された全国音楽祭団体連絡協議会(2000年5月現在30団体が加入)が毎年「音楽祭サミット」を開催、音楽祭のスタッフが集まり、課題について話し合っているが、ここでも、地元でオーケストラを抱えることの財政的問題や、本文で分類した「テーマ型」音楽祭が集客に苦しむ現状が、主催者から報告されている。
- 20)音楽祭サミットでも、地域住民・聴衆との音楽祭の関係が主たる問題になっている。
- 21)山本美紀「武生国際音楽祭—国際音楽祭が地域文化となるとき」長木誠司編集『エクスマジカ』ホームページ <http://www.exmusica.com/kikou/>への寄稿論文。
- 22)様々な調査でその数は一致していないが、最新のものと思われる山本美紀「戦後の日本における国際音楽祭の受容に関する一考察」「文化経済学」第3巻第3号、2003 における調査による。
- 23)久保田、前掲論文、p.6
- 24)久保田、前掲論文、p.7
- 25)報告書『国内外の芸術フェスティバルに関する実態調査Ⅲ』芸術家会議、1994、p.30
- 26)前掲書、p.30
- 27)太下義之「音楽祭におけるボランティア」報告書『ARTS POLICY

- & MANAGEMENT】UFJ 総合研究所芸術・文化政策センター,
2003, p.38
- 28) 太下, 前掲論文, p.39
- 29) 報告書「国内外の芸術フェスティバルに関する実態調査Ⅲ」芸術
家会議, 1994, pp.30-31
- 30) 太下, 前掲論文, pp.39-40
- 31) 越孝弘氏へのヒアリングより, 以下同じ。
- 32) 「音楽祭のあゆみ」木曽音楽祭実行委員編集・発行『小さな町の素
敵な音楽祭 木曽音楽祭20周年記念誌』1994, pp.6-11の要約。
- 33) 「平成13年度 木曽福島町生涯学習情報』pp.6-7
- 34) 木曽福島町教育委員会・木曽福島町公民館発行『平成15年度木曾
福島町社会教育計画』, p.6
- 35) 「ボランティア苦労話」木曽音楽祭実行委員編集・発行, 前掲書,
p.12